

府中のビオトープを見つめて

第1回 はじめてのビオトープ



府中事業所から東へ3kmのところにある浅間山は、間伐管理された里山

多摩川は東京を東西に縦走する。河口付近は灰色の街のイメージが強いが、流域をもう少し遡ればまだいくらか自然が残っている。とくに、支流の野川流域は緑濃い地域として知られ、その北縁にあたる国分寺崖線よりはるか多摩川を望めば、その手前に市街地の海に浮かぶ島々ように緑地が点在する。

その緑にはさまれた東芝府中事業所は65.5ヘクタールの敷地をかかえる。数字でピンと来なければ、東京ドーム13~14個分と言えば、その広さを想像いただけるかと思う。住所もまさに府中市東芝町そのまま。この府中事業所では、地域の自然との調和を目標にビオトープを整備中である。同時に場内の生物調査も実施しているという。このたび縁あって、その紹介記事を引き受けることになった。府中事業所は自宅から歩いても行ける距離にある。残暑を避けた遅い午後、初めての訪問となった。

そもそもビオトープって何ですか？「生きものがにぎわう庭」という声がすぐにでも返ってきそうだが、間違いではないもののそれは一つの側面にすぎない。日本に根付いた植物社会学は中部ヨーロッパの研究を礎にするが、ビオトープの概念は四半世紀前にその筋の人たちがドイツから持ち込んだ。それも自然の復元技術と併せて紹介した。諸手に受けたのが造園業界で、彼らが仕事にしたのである。だから日本ではビオトープと庭がどうしても結びつく。そこで改めて専門書を開いてみれば、ビオトープ＝(生物の)生息場所と一言で片づけている。庭ではないらしいが、しかしこれだけでもさっぱりわからない。

植物の広がりやを植生という。簡単にいえばススキ草地やクヌギ林が植生である。優占する植物を代表させてそう呼ぶが、当然ながら他の多くの植物も共存している。動物も餌や隠れ家を求めて彼らが好む植生を利用する。もっとも動物は自由に移動できるので、土地

との結びつきは緩やかである。こうした「土地と植物と動物の多者共存の関係が成立する空間」がビオトープである。難しく聞こえるかもしれないが、実はそこに特別なことは何もない。昔から親しんできたふるさとの原風景、雑木林や原っぱ、小川こそが皆、ビオトープである。当時はあえて生物多様性などといわずにも、身近に生命があふれていた。こうした当たり前のことの説明が難しいくらい、近頃は自然が失われているということだ。



近年、都市・地域のエネルギーやインフラなど生活基盤全体を IT 技術により最適化して、環境と人に優しい豊かな社会を実現する未来都市「スマートコミュニティ」が注目されている。東芝もスマートコミュニティ事業に注力しており、環境への配慮と快適な生活が両立する社会を目指している。府中事業所はその重要なソリューションを開発・製造している。

スマートコミュニティと生物多様性、あまり関係ないようにみえるが、実は、低炭素社会/循環型社会/自然共生型社会という次世代の街づくりの文脈のなかで強く結びつく。その実現に向けて、地域に暮らす人々、学校や企業が皆で考え、取り組むことが求められる。昨年秋に施行された「生物多様性地域連携促進法」では、生物多様性保全を地域で連携して取り組むことが奨励されている。

東芝府中事業所では、事業所のビオトープから府中エリアにその輪を広げ、将来は野川流域に向けたビオトープ・ネットワークの構築を目指すとのこと。生物多様性の分野でも大いに地域社会に貢献されることを期待したい。

執筆者紹介：新里達也

1 級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。（株）環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。